

就任の辞

2014年4月23日

東洋英和女学院大学 学長 池田明史

このたび、学院創設130周年かつ大学建学から四半世紀という節目の年に学長の重責を担う仕儀となりました。皆様よりご懇切な励ましのお言葉を頂戴しまして、革めて身の引き締まる思いをいたしております。

さて、私どもの世代以上の人間で中学・高校時代に漢文に接したものであれば誰でも、「創業守成の故事」といえばピンと来るだろうと思います。古代中国の唐王朝の創始者太宗が、居並ぶ群臣に対して「創業と守成といずれか難き」と問うたところから始まるエピソードであります。国を建設するのと、その国を守り続けるのと、どちらが難しかろうかという質問です。振り返って考えれば、大学は今、創業期を終えようとしていると言えるでしょう。'Old Soldiers Never Die; They Just Fade Away'とは、かつて日本占領時の連合国軍最高司令官ダグラス・マッカーサー元帥（彼についての研究では本学に日本屈指の研究者がおられます）の有名な言葉であります。本学の **Old Soldiers** すなわち、建学当初の困難や苦労を身を以って知っている人々がもはや数えるばかりとなり、残り少ないその方々も一人また一人と **Fade Out** しつつあるのが現在の局面であります。

村上陽一郎先生からこの職責を引き継ぐこととなった私は、前学長との年齢差ほぼ20歳であり、創業時の苦労も僅かに伝聞で知るばかりです。そのように考えれば、私が第六代の学長に就任するという事実それ自体が、創業から守成への本学の転換を象徴する出来事であると言えなくもありません。

もとより、守成期に入るといっても、それは目の前の一年一年をその時々を全力を尽くして乗り切るという地道な努力の積み重ね以外の道はないはずであります。大学の母胎であり、「敬神奉仕」のスクールモットーを掲げる東洋英和女学院にしても、最初から百年以上も続くはずだと予想し計画して始められた事業ではなかっただろうと思います。

さはさりながら、いまこのときにこの場所にいる私どもは、創業の功臣たちが最初の四半世紀を持ちこたえ、私どもに残してくれたこの大学を、少なくともこれから四半世紀後に健全な状態で次の世代に引き渡す責任を強く意識すべきなのではないでしょうか。私どもには、前の世代から次の世代へと、責任を継承する責任があるのだと思うのであります。

私は、このことを単に大学の自己保存や組織防衛という観点から申し上げているわけではありません。入学式の式辞でも触れましたが、わが国の女子高等教育に果たすべき本学の役割に革めて思いを致すからであります。現在放映中の連続テレビ小説のモデルとなった村岡花子女史が英和に在籍していたのも、ちょうど学院が創業期から守成期に移行しつつあったときにあたります。その時代から百年かかって私どもは、女性が当たり前のように四年制大学に進学できる状況を手に入れました。しかしながら、いったいそのような高等教育を受けた女性たちは、職場において家庭において社会において、果たしてどこまで自分を十分に実現できているのでしょうか。男女雇用機会均等法であるとか、男女共同参画社会とか、上っ面の美辞麗句だけが踊っているように見える私どものこの世の中で、花子女史の時代から本質的な部分のいったい何がどのように変わったのかを問い続けていくこと、それを学生に対しても社会に対しても発信し続けていくこと。それこそが、守成の時代に入った東洋英和女学院の役割であり、ミッションなのだと私には思えるのであります。

冒頭の「創業守成の問い」に対して、太宗は自ら最後に自答致します。私もその言葉を引いて、ささやかながら学長就任に際する決意の表明に代えさせていただきたいと思えます。

「創業の難きは行けり。守成の難きは、まさに諸公と之を慎まん。」